シラバス参照／授業情報参照

授業情報／Course information

戻る

●授業基本情報

科目名／Course title	平和学入門／Introduction to Peace Research		
担当教員／Instructor	宮田　春夫		
対象学年／Eligible grade	1，2，3，4，5，6	開講番号／Registration Code	170Q9031
講義室／Classroom	総合教育研究棟B450	開講学期／Semester	2017年度／Academic Year 第1,2ターム／the first and second term
曜日・時限／Class period	月/Mon　HT限	単位数／Credits	1
授業形態／Type of class	講義	科目区分／Category	
副専攻／Minor	副専攻「平和学」	定員／Capacity	33
分野／Academic Field	99：その他	水準／Academic Standard	03：全学学生受入可・大学基礎水準
抽選方式	手動		

●授業概要情報

更新日／Date of renewal	2017/02/26
対象学部等／Eligible Faculty	全学部、全学年。但し、新潟大学の副専攻規程により、課題別副専攻「平和学」修了のためには、第3年次末までに本科目を履修し、単位を修得しておくことが必要です(「平和学」の修了認定を予定しない4年生の履修も歓迎します。)。また、2016年度以降入学者については副専攻「平和学」を休止するため、副専攻「平和学」の修了認定は得られませんが、履修を歓迎します。 「平和学入門」は今年度の開講をもって終了します。但し、外部講師予算が得られれば、2018年度から、Gコード科目「平和学概論」として拡大して開講したいと考えています。Gコード科目として開講することにより、本学の学生が科学としての平和学を学ぶ機会を拡大する一方で、実践的な内容である「平和を考える」の定員不足緩和にも役立つものと考えます。
聴講指定等／Designated Students	特にありません。課題別副専攻「平和学」の修得を目指していない学生も歓迎します。但し、従来、各学部では副専攻科目は卒業に必要な単位として算入していないので、この点については所属学部の学務係に確認して下さい。
科目の概要／Course Outline	「平和」とは、単に「戦争のない状態」（消極的平和）ではなく，人間が自由に能力を発揮できる状態（積極的平和）を指します。「平和学入門」では、このように 幅広い概念であり、学際性に富む平和学の基本的な内容を概説するとともに学生が考える機会を提供します。
科目のねらい／Course Objectives	課題別副専攻「平和学」の入門科目として、「科目のねらい」に記載の通り、消極的平和と積極的平和の両面について、平和学の基礎知識を習得するとともに、平和学の学修を進める動機を高めること。
学習の到達目標／Specific Learning Objectives	「科目のねらい」に記載の通り、消極的平和(戦争のない状態)と積極的平和(人間が自由に能力を発揮できる状態)の両面について、「平和学」の基礎知識を習得するとともに、平和学の学修を進める動機を高めること。
登録のための条件(注意)／Prerequisites	事前に履修しておくべき科目の指定は特にありません。
授業実施形態について／Study Advice	履修者は毎回授業準備を行うことが必要です。昼休み中の授業なので、昼食をとりながら履修して結構です。
成績評価の方法と基準／Grading Criteria	この科目の到達目標「「平和学」の基礎知識を習得するとともに、平和学の学修を進める動機を高めること」に照らして、授業中の積極的な態度及び期末試験に代わる期末メモ「この授業で議論されたことのうち、どのようなことに関心を持ったか、またその理由は何か」の内容を総合的に評価します。「基礎知識の習得」と「平和学の学修を進める動機を高めること」の割合は1:1とし、「授業中の積極的な態度」と「期末試験に代わる期末メモの内容」の割合も1:1とする予定ですが、授業等の実情により修正することがあります。
使用テキスト／Textbooks	これまで使用してきた教科書は出版から年数が経ってしまったため、使用を取りやめ、教科書は使わないこととします。但し、参考文献中の堀芳枝(編著)『学生のためのピース・ノート 2』(コモンズ、2015年)については、最新の課題までカバーした意欲的な入門書であるので、教科書に準ずるものとして強く推奨します。
関連リンク／URL of syllabus or other information	国際連合 国連開発計画(UNDP) 国連人権高等弁務官事務所(OHCHR) 日本平和学会
参考文献／References	1講 家永真幸『パンダ外交』メディアファクトリー,2012 2講 水木しげる『水木しげるのラバウル戦記』ちくま,1997 同『総員玉砕せよ!』講談社,1995 同『姑娘』同,2010 同『敗走記』同,2010 同『白い旗』同,2010

遠藤美幸『「戦場体験」を受け継ぐということ』高文研,2014
Masahide Ota "This was the Battle of Okinawa"那覇出版社,1981
大田昌秀『決定版・写真記録 沖縄戦―国内唯一の“戦場”から“基地の島”へ―』高文研,2014
『記録写真集 沖縄戦と住民』月間沖縄社,2002(第3版)
沖縄県平和祈念資料館『沖縄の戦争遺跡』沖縄時事出版,2007
沖縄県高教組教育資料センター『ガマ』編集委員会(編)『沖縄の戦跡ブック『ガマ』』改訂版 沖縄時事出版,2013
日比野勝廣『今なお、屍とともに生きる： 沖縄戦嘉数高地から糸数アブチラガマへ』夢企画大地,2013(改訂新版)
新城俊昭『教養講座　琉球・沖縄史』編集工房沖縄企画,2014
琉球新報社『基地と沖縄経済　ひずみの構造』琉球新報社,2012
川島真・貴志俊彦『資料で読む世界の8月15日』山川出版社,2008
小倉貞男『ドキュメント ヴィエトナム戦争全史』岩波現代文庫,2005
沢田サタ『沢田教一写真集 泥まみれの死』講談社文庫,1999年(新装版)
開高健『ベトナム戦記』朝日文庫,1990
本多勝一『戦場の村』朝日文庫,1981
石川文洋『カラー版　ベトナム　戦争と平和』岩波新書
一ノ瀬泰造『地雷を踏んだらサヨウナラ』講談社文庫,1985
一ノ瀬信子『もうみんな家に帰ろー!―26歳という写真家・一ノ瀬泰造』窓社,2003
同『一ノ瀬泰造　ぼくが愛した人と村』窓社,2004
FAMA『サラエボ旅行案内　史上初の戦場都市ガイド』(日本語版)三修社,1994
Kambenga Marie Louise『空を見上げて―ルワンダの内戦そして希望―』,自費出版,2010
＜ビデオ＞
NHK『NHKスペシャル　デジタルリマスター版　映像の世紀』,NHKエンタープライズ,2016
3講
田中正『湯川秀樹とアインシュタイン―戦争と科学の世紀を生きた科学者の平和思想』岩波書店,2008
益川敏英『科学者は戦争で何をしたか』集英社新書,2015
4講
児玉克哉・中西久枝・佐藤安信『はじめて出会う平和学―未来はここからはじまる』有斐閣,2004
斎藤哲夫『平和学のすすめ―その歴史・現状及び課題』法律文化社,1995
岡本三夫・横山正樹(編)『新・平和学の現在』法律文化社,2009
君島東彦『平和学を学ぶ人のために』世界思想社,2009
高柳先男『戦争を知るための平和学入門』筑摩書房,2000
『平和学がわかる』朝日新聞社AERA Mook,2002
大芝亮・山田哲也・藤原 帰一(編)『平和政策』有斐閣,2006
堀芳枝『学生のためのピース・ノート 2』コモンズ,2015
5講
Johan Galtung, ‘Violence, Peace, and Peace Research’“Journal of Peace Research” 6, 167(1969)
福島在行・岩間優希「〈平和博物館研究〉に向けて―日本における平和博物館研究史とこれから―」『立命館平和研究』別冊,2009
6講
川村暁雄「人権と開発・発展」君島東彦『平和学を学ぶ人のために』世界思想社,2009,54-72頁
吉見義明『従軍慰安婦』岩波新書,1995
朴裕河『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』朝日新聞出版,2014
アムネスティ・インターナショナル日本『グアンタナモ収容所で何が起きているのか：暴かれるアメリカの「反テロ」戦争』合同出版,2007
OECD『世界の児童労働』明石書店,2005
香川孝三『グローバル化の中のアジアの児童労働―国際競争にさらされる子どもの人権』明石書店,2010
中村まり・山形辰史『児童労働撤廃に向けて―今、私たちにできること』アジア経済研究所,2013
ジャン・ポエール・ボリス(林昌宏訳)『コーヒー、カカオ、コメ、綿花、コショウの暗黒物語：生産者を死に追いやるグローバル経済』作品社,2005
村井吉敬『エビと日本人』岩波新書,1988
同『エビと日本人〈2〉暮らしのなかのグローバル化』同,2007
本山美彦・三浦展・山下惣一・吉田睦美・佐久間智子『儲かればそれでいいのか：グローバリズムの本質と地域の力』コモンズ,2006
上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー 新版』岩波現代文庫,2012
アジア・太平洋人権情報センター『アジア・太平洋人権レビュー－』現代人文社,1997年から各年
ヒューマンライツ・ナウ『人権で世界を変える30の方法』合同出版,2009
田中優、樫田秀樹、マエキタミヤコ『世界から貧しさをなくす30の方法』合同出版,2006
7講
Amartya Sen, "Identity And Violence:The Illusion of Destiny", Norton,2007,#0141027800(和訳　大門毅(監訳)・東郷えりか(訳)『アイデンティティと暴力:運命は幻想である』勁草書房,2011)
8講
Oliver Ramsbotham, Tom Woodhouse, & Hugh Miall, 'Understanding Contemporary Conflict', in Oliver Ramsbotham, Tom Woodhouse, and Hugh Miall "Contemporary Conflict Resolution",Polity,2011,pp.94-122
磯田厚子「PKOの武力介入が失敗したソマリアの事例」(谷山博史『「積極的平和主義」は、紛争地になにをもたらすか?!:NGOからの警鐘』合同出版,2015)
高野秀行『謎の独立国家ソマリランド』本の雑誌社,2013
Dan Smith “The Penguin State of the Middle East Atlas” Third Edition, Penguin Books, 2016
9講
防衛大学校安全保障学研究会『新訂第4版 安全保障学入門』亜紀書房,2009
国連開発計画(UNDP)「New Dimensions of Human Security」『人間開発報告書(Human Development Report)』1994年版 第2章(和訳版は国際協力出版会発行)
武者小路公秀『人間の安全保障―国家中心主義をこえて』ミネルヴァ書房,2009
10講
Emanuel Adler and Michael Barnett, "Security Communities", Cambridge University Press,1998
高橋敏哉講師「「平和と現代の国際(グローバル)安全保障論」の履修者の自律的発展学習ためのページ」中「

	安全保障論の主要課題の図解のページ」(http://www.iess.niigata-u.ac.jp/~security/illustrated/06security_community.htm) Robert O. Keohane & Joseph S. Nye Jr. "Power and Interdependence", 4th Ed. Longman,2011,#0205082912 (第3版(2001)和訳　滝田賢治(監訳)『パワーと相互依存』ミネルヴァ書房,2012) 11講 名嘉憲夫『領土問題から「国境画定問題」へ―紛争解決論の視点から考える尖閣・竹島・北方四島』明石書店,2013 塩出浩之『越境者の政治史：アジア太平洋における日本人の移民と植民』名古屋大学出版会,2015 明石欽司『ウェストファリア条約―その実像と神話』慶應義塾大学出版会,2009 12講 Amartya Sen, "Development as Freedom", Anchor Books版とOxford University Press版は同内容,1999(和訳は訳が不適切) 大林稔「レント経済を超えて」(大林稔(編著)『アフリカ　第三の変容』昭和堂,1999,20-50頁) 13講 Development and Environment:The Founex Report, United Nations, 1971 Meadows, Donella H., Meadows, Dennis L., Randers, Jorgen, & Behrens S William W. III "The Limits to Growth" Universe Books,1972(和訳：大来佐武郎(監訳)『成長の限界―ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社,1972) Cocoyoc Declaration, United Nations, 1974 文書番号A/C.2/292 米本昌平『地球環境問題とは何か』岩波新書,1994 和田喜彦訳『エコロジカル・フットプリント―地球環境持続のための実践プランニング・ツール』合同出版,2004(原著:Mathis Wackernagel & Williams E. Rees "Our Ecological Footprint: Reducing Human Impact on the Earth" New Society,1995) 塚田幸三・宮田春夫訳『バイオリージョナリズムの挑戦―この星に生き続けるために』群青社,2004(原著:Pooran Desai & Sue Riddlestone "Bioregional Solutions: For Living on One Planet" Green Books,2003) 「環境・持続社会」研究センター『永続可能な地球市民社会の実現へ向けて―「環境容量」の研究/試算―食料・非再生資源・エネルギー』「環境・持続社会」研究センター(JACSES),1999
キーワード ／Keywords	
備考 ／Remarks	2016年度以降入学者(2016年度以降編入者についてはこれと同等と扱われる者)については副専攻「平和学」を休止するため、副専攻「平和学」の修了認定は得られませんが、履修を歓迎します。但し、従来、各学部では副専攻科目は卒業に必要な単位として算入していないので、この点については所属学部の学務係に確認して下さい。 「平和学入門」は今年度の開講をもって終了します。但し、外部講師予算が得られれば、2018年度から、Gコード科目「平和学概論」として拡大して開講したいと考えています。Gコード科目として開講することにより、本学の学生が科学としての平和学を学ぶ機会を拡大する一方で、実践的な内容である「平和を考える」の定員不足緩和にも役立つものと考えます。 副専攻紹介冊子：http://www.ge.niigata-u.ac.jp/iie/students/ 副専攻「平和学」オリジナル・ウェブサイト: http://www.iess.niigata-u.ac.jp/~peace/

●授業計画詳細情報

内容 ／Content	準備学習 ／Preparing learning	備考 ／Notes
以下は一部を省略したものです。詳細計画(http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/nu/2016/heiwagaku_nyumon.html)を参照して下さい。 1.新潟大学の副専攻「平和学」：「平和を考える」との関係、宣言、目指すもの 副専攻パンフレット：「「平和学」の履修により、世界の人たちのことを自分に関わることとして考えられる、21世紀にふさわしい国際人になってもらいたいと願っています。」 ◆学生に求められる準備： 副専攻パンフレットの「平和学」のページを読んでおくこと。 ○参考文献・資料：新潟大学副専攻パンフレット 副専攻「平和学」ウェブサイト「新潟大学非核平和宣言」1987年 軍拡に傾く現下の情勢と対立緩和に知恵を絞った歴史 2.戦争とはどんなものだったのか。第1次大戦、第2次大戦、核の恐怖、朝鮮戦争、ベトナム戦争、北アイルランド、インド・パキスタン紛争、スリランカ、中東、パレスチナ、アフガニスタン、オウム真理教、アルカイダ、イスラミックステート。また、日本国内でほとんど報道されることのないところでの戦争・武力紛争。特に第2次世界大戦に関し、最前線の兵士の経験、市民の経験、政治家、核兵器の使用、沖縄戦、世論、報道、慰安婦、在日韓国・朝鮮人、南京大虐殺、満州国、残留孤児、フィリピン等で取り残された日本人の子供。 ◆学生に求められる準備：自分が聞いた話、読んだ話、見たテレビ番組、訪問した戦跡、博物館を思い起こす。 ○参考文献・資料：実に多数。 第二次大戦が終わるとは、日本以外の人々にとってどういうことだったのか。 ベトナム戦争,サラエボ,ルワンダ大虐殺。 ビデオ:『NHKスペシャル　映像の世紀』 「平和博物館」 3.平和学の始まり： 核兵器、アインシュタイン、湯川秀樹 ◆学生に求められる準備：自分がアインシュタインだったらどう考えたかを考えておく。	左の各回の「学生に求められる準備」に従い、提示した参考文献等、各回のテーマに関わる文献で関心のあるものを読むことなどをして下さい。	

○参考文献・資料：『湯川秀樹とアインシュタイン―戦争と科学の世紀を生きた科学者の平和思想』、『科学者は戦争で何をしたか』
4.平和学の歴史: 帝国主義、世界の分割、第1次世界大戦、第2次世界大戦、国連憲章、核兵器、人権宣言、東西対立、非国家の武力集団、積極的平和への展開。
◆学生に求められる準備：国連憲章の関連部分を読んでおく。また、国家とは1人1人にとって何なのかを考えておく。
○参考文献・資料(省略)
5.平和学の基本概念: 消極的平和と積極的平和
◆学生に求められる準備：日本における「平和教育」は何を目指してきたのかを考えておく。
○参考文献・資料： Johan Galtung 'Violence, Peace, and Peace Research'(消極的平和と積極的平和の区分を行った論文)
「〈平和博物館研究〉に向けて―日本における平和博物館研究史とこれから―」(戦争経験、特に被害の展示の中心でやってきた博物館を平和構築の役割を積極的に果たすものにしていこうとする論文)
6.構造的暴力の状況： 多様な構造的暴力の概観
◆学生に求められる準備： 世界の人権問題、格差、独裁等の問題としてどんなものがあるかを考えてみよう。
○参考文献・資料：多数。例えば、川村暁雄「人権と開発・発展」,村井吉敬『エビと日本人』、アジア・太平洋人権情報センター『アジア・太平洋人権レビュー－』
従軍慰安婦、グアンタナモ収容所、児童労働、ジェンダー、貧困、足元の日本の市民的・政治的自由：市民的及び政治的権利に関する国際規約の日本における実施状況についての国連人権理事会の見解、日本の報道の自由についての国連人権理事会の調査者の訪問を日本政府が拒んだ問題、国境なき記者団による各国の報道の自由の評価、特定秘密保護法案に反対する日本平和学会会員有志による声明文
7.世界秩序対国際秩序： 様々な人間集団：国家、民族、言語集団等々。Identity(『文明の衝突』と『Identity and Violence』)
◆学生に求められる準備：自分のアイデンティティーを考えてみる。
○参考文献・資料: Sen, "Identity And Violence: The Illusion of Destiny"(和訳『アイデンティティと暴力: 運命は幻想である』)
それぞれの人には多様なアイデンティティーがあり、その多様なアイデンティティーによって多様につながっている。宗教だけが人の唯一のアイデンティティーと思いこまされてはならない。しかも、そう思い込んだ時に犠牲になるのは社会的弱者。
8.様々な人間集団と「国民」、国家。ソマリアの事例(様々な武力集団、ソマリランド)。
◆学生に求められる準備：「国民国家」とは何か、「国民国家」はどの程度実現しているのか、国民国家づくりを目指すのは最善なのかを考えておく。
○参考文献・資料：'Understanding Contemporary Conflict'(1970年代以降にAzarが示していた紛争についての見方)
9.安全保障： 国家安全保障、人間の安全保障
◆学生に求められる準備：国家安全保障と人間の安全保障について、どちらがより基本的・本質的なのかを考えておく。
○参考文献・資料： 国連開発計画『人間開発報告書(Human Development Report)』1994年版第2章「New Dimensions of Human Security」(http://hdr.undp.org/ 「人間の安全保障」の解説)
武者小路公秀『人間の安全保障―国家中心主義をこえて』(副題の示す通りの内容)
10.Realist、security communities, complex interdependence, imagined community、”we”の問題
◆学生に求められる準備：世界の人々の直面する問題を国家中心で考える場合と、1人1人の人間中心の場合とを考えてみる。
○参考文献・資料:"Security Communities"(国家間の公式な(国家を代表する首脳や外交官)交流を、非国家の人々等の交流が上回り、両国の人々が、両国の人々を合わせて「we」と考えるようになると、両国間に武力行使が無くなる。)
高橋敏哉講師「「平和と現代の国際(グローバル)安全保障論」の履修者の自律的発展学習ためのページ」中「安全保障論の主要課題の図解のページ」(上記の考え方の図解)
"Power and Interdependence"(2つ以上の国家の間で、多様な課題が明確なヒエラルヒー無く、多様な課題を巡って多様なアクターが交流し、役割を果たし、国家間で互いに武力を行使したり、武力で脅し合ったりすることのない複合的相互依存)
11.領土問題：すべての陸地はいずれかの国家に帰属するという前提、全ての人はいずれかの国家に帰属するという前提。現在から過去を推測することで引き起こされる問題－背景を含む当時の事実を確認することの重要性。

◆学生に求められる準備：国家としての日本の範囲の拡大の歴史、列強による世界の分割の歴史、無国籍者と国家によるサービスとの関係を考えてみる。 ○参考文献・資料:『領土問題から「国境画定問題」へ―紛争解決論の視点から考える尖閣・竹島・北方四島』（それぞれの国家は、他国の征服・併合を行い、また、いずれの国家にも帰属していない土地や人を取り込んでいった歴史が1945年まで続いた。そのために画定できていない国境の問題。） 塩出浩之『越境者の政治史：アジア太平洋における日本人の移民と植民』(第二次世界大戦後の日本国境内部における均質な日本国家のイメージを自明の前提としていることの誤り。現在に至るまで、近代を通じ、国民国家が規範的単位を超える実在となったことは無かった。実在してきたのは、支配領域を度々変えて来た主権国家と、空間的境界を持たずに移動し変容する不定形な民族集団。） テロという暴力で混乱を引き起こす人間がいる一方で、国連の人権関連の仕組みを使って粘り強く問題の努力を重ねてきたアイヌの人たちについての情報：北海道アイヌ協会ウェブサイト。国連人種差別撤廃委員会の見解 12.開発とは何か：目的と手段。人は、政府や援助機関がしてくれることを受け取る主体ではなく、agentとして、自ら生活を良くするために行動する主体である。1人1人がその人なりの理由によって価値があると考える生活を送る力が根幹を成す。しかし、個人若しくは家族にできることには限界があるので、様々なしくみが必要。また、社会的存在として1人1人はしくみや政策の決定の議論、共有の価値観や規範を作る議論に参加する必要がある。 経済的低開発、社会的低開発、政治的低開発 ◆学生に求められる準備：すべての国家はその領域に暮らす1人1人若しくはそれぞれの家族の生活を良くすることをしているか、例えばアフリカの多くの国家の場合は。日本ではどうか。 ○参考文献・資料：Amartya Sen "Development as Freedom" 13.環境と開発、地球環境問題、sustainable development, ecological footprint ◆学生に求められる準備：「地球環境問題」とは何かを考えてみる。自分のecological footprintの大きさを調べてみる。 ○参考文献・資料：'Development and Environment: The Founex Report'(「Development」とは人の生活を良くするという幅広い概念であり、環境の保全もこの幅広い「development」の一部である。） "The Limits to Growth"1972 (『成長の限界―ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』) (付されたローマクラブの見解:人間としてのニーズが満たされるに至った先進国の者はこれ以上の成長を求めることなく、今後の成長分は、それがいまだ満たされていない人々のそのニーズを満たすために使うべき。） Cocoyoc Declaration(「human family」の認識の下に、人間としての基本的ニーズが満たされていない人々のニーズを満たすことと、その余地を作るために、大量消費により過度な負荷を資源・環境にかけている先進国の者はそれを削減すべき。） 『地球環境問題とは何か』(国際的に口を差し挟むべき環境問題を「地球環境問題」と呼ぶようになった。） 『エコロジカル・フットプリント―地球環境持続のための実践プランニング・ツール』(1980年頃、全人類の環境負荷は、実在する地球の資源・環境を上回った。先進国等の者が、開発途上国等の人々の人間としての基本的ニーズを満たすために使わなければならない資源・環境を使ってしまっていて、なお足りない分は、将来の世代のために残しておくべき分にまで手を付けてしまっている。） 「環境・持続社会」研究センター『永続可能な地球市民社会の実現へ向けて―「環境容量」の研究/試算―食料・非再生資源・エネルギー』(和食、地産地消、旬のものを食べることにより大幅に環境負荷が小さくなる。） 14.平和学の概要とぞれぞれの学生の関心 ◆学生に求められる準備：この授業で議論されたことのうち、どのようなことに関心を持ったか、またその理由は何かを考えておく。 メモの提出：上記の「この授業で議論されたことのうち、どのようなことに関心を持ったか、またその理由は何か」をメモにして提出する。		